

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On Ebina Danjo and "Japanese Christianity"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 關岡, 一成, Sekioka, Kazushige メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/958

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



海老名彈正と「日本的キリスト教」

關 岡 一 成

はじめに

海老名彈正は、一九三七年五月二二日に八十歳八ヶ月の生涯を東京で終えた。葬儀は、彼が名誉牧師であつた本郷教会（現・弓町本郷教会）で行われた。同志社においても、第一回卒業生であり、八年余にわたり総長を務め貢献のあつた人物であつたので、その追悼式が催された。この席で、総長の湯浅八郎は「惟ふに先生は日本的基督教の樹立と、新天地の開拓とに其の全生涯を献げられ、時を得るも時を得ざるも、善且つ忠なる基督の使徒として、常に光に歩みて終始一貫変るなし」と、追悼の辞を述べた。

この湯浅の言葉に代表されるように、海老名の生涯は「日本的基督教の樹立」に努めた生涯であり、彼のキリスト教受容の特色はまさに「日本的キリスト教」にあつたと言える。

ところが、今日「日本的キリスト教」と言えば、一九三〇年代より一九四五年来、主に国家至上主義下で、キリスト

教を伝統的・日本精神に同化させる、不都合な場合にはキリスト教を變容する形で主張された、偏向したキリスト教とされることが多い。さらにこのような「日本的キリスト教」の源泉として、海老名彈正の名が挙げられる。⁽²⁾

はたして、海老名の「日本的キリスト教」は、国家至上主義下で主張された「日本的キリスト教」と直接に結びつき、源泉とされるものであったのだろうか。

海老名の「日本的キリスト教」について、東大の学生時代から海老名に師事し、良き理解者であった中島重が次のように述べている。

日本の基督教は先生によりて開かれたものである。(略)今日の反動的なものに比して遙に自然であり且つ当然であったと思ふ。そして日本人としての基督教を体験するといふ所に重点があつたことと思ふ。(略)先生は実に今日の日本の基督教よりもつと健全にして立派なものを、既に今より四十年乃至五十年前に創始せられた先覚者であると言はねばならぬのである。⁽³⁾

これを読むと、海老名のキリスト教が「日本的キリスト教」であつたこと。一九三〇年代より主張され始めた「日本的キリスト教」より健全で自然なものであつたこと。そして、それが半世紀以前から主張されているものであることがわかる。

中島重は、この言葉を海老名の死の直後に記しているので、一九三七年に既に、海老名の「日本的キリスト教」と、一九三〇年代以降に声高に主張される「日本的キリスト教」との違いを認識していたことになる。

筆者は、中島が主張したように、海老名の「日本的キリスト教」は、一九三〇年代から主張されたものと同一視することや、その源泉とすることには、同意できない。本稿では、海老名が「日本的キリスト教」を主張、樹立しようとした動機、その内容などについて以下に考察することにした。

一 宣教師からの独立

海老名の記すところによれば「日本的キリスト教」が主張され始めたのは、一八九〇年頃(4)からということである。

この言葉で思い当たるのは、横井時雄が「日本風の神学を組織し、日本風の礼拝儀式を創始せんことを希望するものなり(5)」と主張したのが、一八九〇（明治二三）年だったことである。恐らく、この時期にすでに海老名も同じように考えていたものと思われる。

「日本的キリスト教」は、最初期の日本人プロテスタント指導者の神学的覚醒と深くかかわるものである。魚木忠一は「神学的覚醒は明治二十一、二年を中心とする前後の数年に起り、この時に初めて、日本の基督者特に指導者は神学を学的問題として反省した(6)」と述べている。

日本人指導者たちが神学的に覚醒した一八九〇年前後というのは、熊本バンド・横浜バンドの青年たちが、キリスト教受容をしてから十年ほど経た年である。彼等は、この頃には神学校を卒業し自由に英語を読めるようになり、宣教師の口授によるキリスト教から解放され、書物により様々な神学思想に触れる中で、日本人独自の神学を主張するようになったのである。

海老名は「開教五十年を祝す」と題する文章の中で次のように記している。

彼等の多くは自由に英語を解したるが故に、宣教師の口授より得たるよりも、その涉獵したる欧米の書籍より学得たのが多かつたのであらう。彼等は基督教の大真理を標榜して奮起することは奮起したれども、その心理に表現せられたる種々様々の思想の調和には苦悶奮闘したのである。吾人はその悲惨なる実験を諒とする。彼等が外界に向つて奮戦しつつあるうちに、その内界に於ける苦悶は恐らくは彼等其れ自身にあらざれば分らなかつたのであらふ。⁸⁷

近代における日本人のプロテスタント・キリスト教受容は、ほとんどが外国人宣教師・教師の口授によるものであつた。宣教師には、例外的な人物もなかつたわけではないが、多くが道德的・人格的にすぐれた人物であつた。海老名も宣教師が篤実温厚の士君子であり、日本人のために尽くしたことを高く評価する。⁸⁸

しかし、宣教師たちは日本人教会・キリスト者を経済的に支援したが、同時に思想的・神学的にも同一であることを要求した。当初は、日本人キリスト者は、キリスト教について無知であり、疑問を感じる点もあつたものの、反論する知識がなく、宣教師の信仰・神学を受容した。ところが、一八九〇年前後にこの状況に変化が現れる。

日本人中には、確に独立の思想が起つて来つゝある。或者は初めからあつた。又は途中にしてそれが発生して来た所の者もある。初めは外国宣教師を師に仰ぎ、自ら其弟子となつて居るので、何も彼も其師の教ゆる所を是として

居つた時代もあつたらうけれども、併ながら日本人の知識が進み、見識が進み、信仰が進むに従て、外国人の為す所に、悉く同意する訳に行かない、悉く敬服する訳に行かないのであつて、日本人が独自一個の議論を主張する訳になつた。⁽⁹⁾

海老名も独自の思想・神学の確立するには「殆ど十年の間紛々擾々たる神学の乱麻の中に苦惱し⁽¹⁰⁾」なければならなかつた。そして、海老名が思想・神学の自由を求めて、宣教師から独立して独自の神学を主張せざるを得なかつたのには、二つの理由があつた。

一つは、海老名が接した宣教師のほとんどが聖書無謬説に立脚して、処女降誕・奇跡なども文字通りの事実として教え、信じさせたことにある。彼は、当初こそ反論も出来ず教えられるままに信じたが、科学的知識との矛盾に悩みつづけた。しかし、英書が自由に読めるようになってから、欧米の最新の神学書を読むことにより高等批評や宗教哲学に触れ、科学的知識と調和する神学に到達し、宣教師の神学から離れることになつた。

宣教師の主張した聖書無謬説や保守的な神学が、海老名をして独自の神学樹立の必要性を感じさせたが、それ以上に切実に彼を独自の神学形成に駆り立てたのは、宣教師の日本・日本人理解や日本の伝統的思想・精神に対する無知であつた。

海老名は「基督教のみが天啓であるとか、白哲人種のみが優等人類であるとか、クリスチヤンのみが神の選民であるとか、東洋人は詛はれたるハム人種であるとか基督教国ばかりが光明国であつて、異教国は普く暗黒界であるなど主張⁽¹¹⁾」する宣教師には同意することができなかつた。

確かに日本は、科学的知識においては欧米に劣っていた。しかし宗教・倫理の面においては、未開・野蛮の国ではない。既に、宗教としては神道・仏教があり、倫理としては儒教が存在した。

未開の人民は、絶対的に文明人の思想に服従して、さうして其指導を受けぬばならぬ。けれども日本の如きは、既に其文明を有つて居る所の国である。其文明は、形体上の文明もあつたが、唯だ形体上の文明ばかりではなく、思想上の文明も有つて居る。科学的思想の如きは、比較的少なかつたので、大に欧米人に学ぶ所があつたにもせよ、宗教、倫理の事になつて見ると、案外開けて居つたものと云はなければならぬ。¹²⁾

海老名は、宣教師の主張する、キリスト教以外の宗教は全て迷信であり、真理はなく、それを基とする道徳・倫理は野蛮なものであるとする考えには同意することができなかつた。特に、キリスト教を知る機会も無かつた祖先に対して、キリスト教徒でなかつたから地獄にいると平然と答える、宣教師の信仰・神学には納得ができなかつた。¹³⁾ これら二つの理由により、彼は独自の神学として「日本的キリスト教」を提唱するに至つたのである。

二 キリスト教の「日本化」

「日本的キリスト教」と聞くと、キリスト教は普遍主義・世界主義に立脚する宗教であるのに、それに特殊的・限定的な「日本的」と冠するのはおかしいと考える人がいる。これに対して海老名は、キリスト教には世界的・普遍的要素

と民族的・特殊的要素の二面があり、⁽¹⁴⁾世界的・普遍的要素だけのキリスト教は存在しないとする。

欧州各国は大抵基督教である。が同じ基督教を奉じて居ても仏蘭西、伊太利、英、独皆違ふ。これは舊に宗派が別である云ふ計りでなく、同時に宗派は国民の別であるとも云へる。希臘教は露西亞に、天主教は伊太利、仏蘭西に、プロテスタントは英、独に發達した。⁽¹⁵⁾

同じキリスト教であるが、それを受容する国民の国民性・民族性と結びついて、それぞれ特色のあるキリスト教を形成していると言ふのである。

日本は未開国でなく、文明国であり、神道・仏教・儒教などに養われた国民性があるので、これを基としたキリスト教の形成が必要であるとした。

欧米民族は同じく基督教を遵奉すれども、列国の基督教が著しく相違せる色彩を有して居るのは如何に獨創的精神を鼓吹して居るかが分る。故に基督教が日本に伝はる途中には日本の色彩を發揮し、そこに日本の基督教なるものを生ずるは自然の成行である。基督教は日本人の最も深い最も神聖なる感情を覚醒し、新たなる知識を開かしめ、更に善良なる意志を喚起するのである。故に基督教は日本人より獨創の精神を喚起するものである。⁽¹⁶⁾

海老名が、神道・儒教・仏教などを土台・素地とする「日本のキリスト教」を主張した背景には、⁽¹⁷⁾キリスト教を唯一

絶対の宗教とせず、他宗教にも真理が存在するとする考があつたことも忘れてはならない。

神儒仏諸教の中にも迷信的なものはあるが、又真理もある。それを宣教師等が頭から迷信なり偶像教なりと罵倒したのは大なる間違と云はねばならぬ。基督教のみが真理の全部にして他の宗教は迷信の塊なりと云ふ事は出来ぬ。

基督教とても其の今日に至るには凡ての知識や思想が之を助けて此進歩發達を來したので、殊に我等の信ずるプロテスタント教は種々なる思想や科学の光に輝され、否な夫れによりて濾され、鍛錬せられて茲に至つたのである⁽¹⁸⁾。

真理は「我等の主ナザレのイエスに於て最も円満に完全に表現されたのである⁽¹⁹⁾」が、基督教の神は天地万物を創造した神であるから、その天啓は日本とその歴史にもあり、幾分かの真理を有している。

それ故に、海老名は、欧米の基督教の直輸入でなく、日本の歴史・伝統思想に表された真理を採求し、それを発輝・發展することにより「日本的基督教」は樹立するとして、「宗教は輸入するものでなく、発輝するものである⁽²⁰⁾」が、彼の確固とした信念であつた。

では具体的に、神道・儒教・仏教に表された真理、しかも基督教の真理に至ることによって完全・円満になる真理とはどのようなものであるのか、を論じる必要があるが、筆者はこれについては、稿を改めて考察する予定にしている⁽²¹⁾ので、ここでは省きたい。

ただ、海老名の神道理解について少し触れておきたい。というのも彼の「日本的基督教」は、神道と習合した「神道的基督教」であると批判されるからである。その論拠の一つが海老名の次の言葉である。

日本の古伝によれば八百万神の中に唯一の根本神がある、天之御中主は即ち此統治者である。古伝によると唯一の統治者が明確ならざるが如き観もあるが真淵本居以後の国学者は此の天之御中主を以て宇宙及万神の根本と認めて居る。基督教の唯一神教も猶太教より発したのである。ユダヤ教は唯一神教の揺籃ではあるが、乍併その遠い昔は多神の存在を認めて居つた。又基督の時代とても様々の天使とその様々の階級を認めて居つた。要するに八百万神の上に厳然として天之御中主のあるが如く、八百万の天神の上に唯一のエホバを認めて居つた。故に此御中主の尊厳を認め、森羅万象を統治する唯一の神と崇むるやうになれば、基督教の神観と大同小異の点にまで、その思想を展開することは決して不自然ではない。故に日本の多神教に一大改革を加へ、所謂宗教界に於ける一大王政維新を断行すれば基督教と古神道とは神観に於て同一の宗教となることが出来やうと思ふ。²²

この文章から、天之御中主神とエホバとを同一視し、キリスト教と神道を習合させているとされる。確かに、最後の「基督教と古神道とは神観に於て同一の宗教となることが出来やうと思ふ」だけに注目すれば、キリスト教の神道化ともとれなくないが、一番重要な点は、神道の神観にもキリスト教の唯一神へ発展させることのできる神観があるという所にある。というのも神道の神観は昔も今も多神教を基としており、唯一神を基本としていない。²³海老名がキリスト教の神を神道の神観のように多神教的・民族的に解釈しているのなら、神道と習合させていると言えるが、全く逆に神道の神観をキリスト教化して唯一神的に解釈しているのである。

彼は、この論文の序論で「基督教が日本人の間に伝播するには日本古来の思想を全然根本より破壊せねばならぬのであるか、又は之を改善し発展せしむればよいのであるか、或は竹に木を継ぐやうにせねばならぬか、又は木を木につぐ

やうにせねばならぬか、その辺は深き研究を要することなれば、今その研究の端緒として聊かこゝに論じて見やう⁽²⁴⁾と記している。

海老名は、キリスト教の神観は唯一人格神と把握しているので、日本の伝統思想、特に神観で大きな影響を日本人に与えてきた神道の神観の中から、キリスト教の唯一神へ改善・発展できるものとして天之御中主神を取り上げているのである。これは決して、キリスト教の神を神道化するものでなく、逆に神道の神をキリスト教化したものであると理解すべきである。

海老名は、大多数の宣教師と異なり、日本の伝統思想・宗教に真理を見出す、という点でキリスト教の日本化を主張した。しかし、この日本化は、キリスト教と神道・儒教・仏教との同一化を意味するものではない。もし、キリスト教と神道とが同一であるというのであれば、キリスト教受容の必要はなくなる。彼の主張した「日本的キリスト教」は、キリスト教と神道・儒教・仏教との習合や折衷を説いたものではない。

吾人は基督教の為に神道の敵たらんと欲するにあらず、儒教の友たらんと欲するにあらず、又仏教の敵たらんと欲するにあらず、神道も儒教も仏教も断じて邪教ではない。之を嫌悪するはクリスチャンの道にあらず、神儒仏各々上天の使命を有して起りたるもの、浅墓なる人意の作為に由つて成立したるにあらず。吾人が之に対する態度は一視同仁たるべく又寛忍包容たるべきである。然れども日本教化を速ならしめん為に、儒耶の折衷や、儒仏耶の折衷や仏耶の折衷や、神耶の折衷を企つる者は、基督教の本質を知らざるのみならず、宗教の歴史を弁へざるものといふべし、又禍を後世に遺すもの少からざるべし。斯る折衷主義の如きは現代日本の情況に最も適合して居るやうな

れども、遂に時代的たるを免れ得ない。⁽²⁵⁾

海老名は、キリスト教と神道・儒教・仏教との習合・折衷を説くという立場でなく、キリスト教は、神道・儒教・仏教の真理を一要素として既に包含する⁽²⁶⁾として、キリスト教の「日本化」を主張したのである。

三 日本「キリスト教化」

海老名の主張した「日本的キリスト教」には、前述のようにキリスト教の「日本化」の面があるが、同時に日本の「キリスト教化」の面を持つものであった。

基督教はその本質を犠牲にして日本化するものではない。(略)基督教の本質はギリシヤ化せられたるにもあらず、羅馬化せられたるにもあらず、独逸化せられたるにもあらず、アングロサクソン化^マせられたるにもあらず、寧ろ是等の有らゆる民族を基督教化せんと努力し来つたのである。⁽²⁷⁾

では、海老名は「日本化」できないキリスト教の本質、日本をどういふ点で「キリスト教化」しなければならないと考えたのであろうか。

基督教は千状万態にして、国々に異なり世々に同しからざるありと雖も、縦横一貫する所の聖氣あり、即ち基督教の基督教たる所にしてこの聖氣を有する限りは何の状態を装ふも基督教の版図に漏れざるなり、(略)基督教の基督教たる宗教思想に至りては諸派に貫通して同一なるものあるは疑ふべからず、是れは礼式にあらず、組織にあらず、教義にあらずして、神に対しては敬、人に対しては愛たる、敬愛二情の感能を共有するものにあらずや、而してこの感能を養成する所の教義たる、即ち神の唯一天父たること人類の兄弟姉妹たることの二教義は諸派を通して共有するものにあらずや、之を一言すれば天人父子兄弟の道即ち是れなり。²⁸⁾

キリスト教の本質は、唯一人格神であり、人類が兄弟姉妹であることにある。「日本的キリスト教」も、これを抜きにしては考えられない。海老名は、この本質に基づき、日本の「キリスト教化」を主張した。

彼が日本の「キリスト教化」として第一に強調したのは、民族主義から脱却して世界主義に至る必要性である。

基督教は由来万国の神を宣伝しつゝある。一民族に限られたる神々を尊信し来りたる国民の信念とは大にその性質を異にするのである。日本は古来多神の国であつて、ギリシヤ及羅馬の民族とその信念を同うするものである。この多神教は民族的宗教であつて、基督教は人類的宗教である。前者は民族を本位として立ち、民族と偕に生れ、民族と偕に興廃するものである。然れども民族はその世界的發展を遂ぐるに於ては、此民族的宗教を脱却して、人類的宗教を取ること難事にあらず。或る意味に於ては此民族的宗教を超越せねばならぬ。現代の英米独露等の大国は既に民族的宗教を脱却して人類的宗教を遵奉しつゝある。基督教はその人類的宗教の本領を鼓吹して日本民族の民

族的宗教と衝突し来つたのである。神道は古来民族的宗教であつた。今後その存在を保全せんとするには、その民族的性質を一変して人類的宗教とならねばならぬ。何となれば日本民族そのものがその偏狭なる民族主義を脱却して、世界的生活に入りつゝあるが故である。基督教の唯一神的信念は偏狭なる日本古来の民族主義とは全然衝突するを免れざらんも、その一躍して世界的となる精神とは全然一致するのである。²⁹

海老名は、仏教がインドに生まれ、その後ヒマラヤを越えて中国・朝鮮を経て日本に伝来したのは、民族主義でなく、仏の大慈大悲・光明返照という世界精神であつたのに、日本においては日本化・民族化してしまつた。これは、仏教の墮落であり、仏教の大損失であるので、キリスト教は仏教の二の舞になつてはならぬと警告する。

基督教は何故に疑はれたか。何故に厭たか。世界的精神のある為である。けれどもそれが我々に将来のある所以である。どこ迄も民族的で、小さい大和魂にかじり付いて居る様ならば、我々の運命は定つて居る。何と云つても我々は神の国の実現を望むものにて日本魂をして世界的に發展せしめなくてはならぬ。苟も二千五百年の大精神があるなら、将来の大日本を生む事を自覚せねばならぬ。これ実に我々が疎んぜられ、排斥せられ乍ら、希望を以て進む所以である。我々は一面に於て基督教の日本化する事を喜ぶ。けれども凡てではない。若し基督教の精神を捧げて唯日本化する事に努むるなら、其終は仏教と同じである。³⁰

日本の「キリスト教化」の必要性の第二は、唯一人格神に基づく倫理の確立である。日本の伝統思想においては、宗

教と倫理が分離していた。

徳川時代の状勢を顧れば、儒者は宗教を軽視して之を僧侶の一手販売に放任し、其職として修むる所は五倫の道に外ならざりき。仏者は倫理を卑下して俗界の業務となし、自からは傲然として高く構へ、超然として遠く雲深き処に隠れたり。而して其雲深き所といふが、最も厭ふべく悪むべき魔窟となりたるは、衆人の普く知る所。倫理を卑下する宗教界は俗よりも更に俗なる魔窟と化し去り、宗教を軽視したる倫理界は空文虚霊の形式主義に支配せられて、恬として恥る処を知らず、寧ろ偽善の横行を放任するに至れり。

斯る状勢は明治の時代に至りて最も甚しく、倫理界は宗教を軽蔑するのあまり、其極めて浅薄なる忠君愛国の倫理を標榜して、能事了れりと思惟し、徒らに教育勅語を奉読して、儀式の形ばかりを旨とし、聖影崇拜を以て忠の極致と誤り考へ、昔ながらの祖先崇拜に擬し、忠良の子民が焼死するよりも、聖影の焼失せざるを光榮とするに至りては、沙汰の限りと謂ふべきなり。³¹

しかも、日本に必要な倫理は、多神・汎神を基とするのでなく、唯一人格神でなくてはならない。

簡単にして明瞭なる真理とは、天地万有の根拠たる唯一神の實在である。この實在に対する国民の信仰を促すことが最も重要な点と思ふ。(略)国民一般の信仰は多神教である、否らざれば汎神教である。日本の宗教思想は多神教が進化して唯一神教となるよりも、寧ろ汎神教となる傾向を有するのである。(略)汎神教は自然主義の哲学

思想を満足せしむることを得れども、倫理的人格主義の要求を促す能力を有しない。(略)基督教は人道の本位を神と自己との深い関係に据ゆるが故に、その人倫の根底は最も深く徹底して居るのである。(略)この神との関係は神秘的にあらず、哲学的にもあらず、人格的にして倫理の基礎となるのである。自己が神の中に没入する生活にあらずして、神の中に覚醒する生活である。⁽³²⁾

キリスト教では、神を唯一とすると同時に父と人格的に理解し、人間を神の子と捉える。そこから、個人の価値がかけがえないものとして高調される。ところが、日本の従来の伝統では「父母の価値を知り、主君の価値を知り、又国家の価値を知る、然れども自分一個人の価値を知るもの甚だ稀である」⁽³³⁾。

それゆえ、日本の「キリスト教化」として、神の子としての個人を高調する必要がある。具体的事例としては、天皇一人を神聖として認めるのではなく、国民各自が神の子として神聖なる存在とされなければならない、という主張になる。

神聖にして犯すべからざる権威を国君一人に認め、しかして国民は悉く皆その臣たるは、真に誉むべき国柄ではあるが、未だ以て理想的とはいはれない。その神聖なる権威は宣しく国民各自の命脈を通じて普及すべきではなからうか。(略)人民は国家の臣民としてのみ永久に止まるべからず、又その友たるを自覚すべきである。こゝに於て犯すべからざる権威は独り国君一人に存するにあらずして国民各自の中に存することゝなる。神聖の権威が国君一人に存する国家と国民全体に存する国家と孰が尊きかは自から分明である。帝国の臣民もこの高い境涯に進み来らずしては未だ以て誇ることは出来ない。⁽³⁴⁾

また、男女は共に神の子であるから平等である、として結婚における一夫一婦制が主張される。海老名は、日本の「キリスト教化」として、一夫一婦制を高調し、特に従来の伝統思想においては重視されなかつた男性の貞操にも言及した。

基督教の基督教たる所、例へば男女の關係の如き問題に至つては日本在來の習慣とは極力戦はねばならぬ。而して勝利を得ねばならぬ。即ち一夫一婦主義の如きは衝突を予期してか、らねばならぬ。此点は寧ろ日本人を全然基督教化する爲めに最も大胆に奮闘を要するのである。⁽³⁵⁾

女子が社会にその品位を有し、男子と協力して、社会の經營に従事するには、第一に男女の貞操が保障されねばならぬ。男女の貞操が保障されずしては、家庭は立つべからず。少くとも女子の貞操が保障せられざる限り、家庭は成り立たないのである。その如く男女協力して社会の經營を遂行するには、男女の貞操が保障されねばならぬのである。日本在來の宗教は果して男女の貞操を保障し得たのであるか。神道も儒教も仏教も男女の貞操に対しては何等高尚なる理想を有せざるのみならず、少くとも男子をしてその情欲を恣にせしめて顧みなかつたのである。此の如き宗教が戦後の權威たることを得ざるは論ずるまでもないのである。加之神儒仏は女子を尊重し、女子を教育し、女子をして男子の友たらしむる爲めに、何程努力したのであるか。女子の参政権を目して危険思想と断ずる宗教は戦後の權威とはなり得ないのである。⁽³⁶⁾

魚木忠一は、「日本的キリスト教」を他の五類型と共に成立し得るものとして、次のように述べている。

基督教精神史にとつては、六個の類型が取上げらるべきである。六個とは、ゼーベルクの論じた、ギリシャ、ラティン、ゲルマン、ロマ、アングロ・サクソンの五類型と、此処に私の主張せんとする日本類型とである。これらの六類型は単なる反復でなく、各々独自の基督教理解であり、同時に他を補ひ深める意義を持つたものである。これらは発展過程に於ける段階の如く、次の段階に達した時には止揚されるといつた性質のものではない。⁽³⁷⁾

さらに、海老名の「日本的キリスト教」を評価して「私は基督教に於ける日本類型の成立を信ずる。思想家としての先生はこの点に於て注意される第一人者である。(略) 日本的自覚に根ざした基督教思想家の最優なるものとして、先生の神学は基督教日本類型の古典たる意義を持つことを疑はない⁽³⁸⁾」としている。

海老名の主張した「日本的キリスト教」は、魚木が指摘するように「日本的自覚」に根差すものであった。しかも、この「日本的自覚」は「アングロ・サクソン型」の宣教師のキリスト教との接触の中で、自然に自覚され形成されたものであると言える。日本人としての民族性・国民性に立脚するキリスト教受容、ある意味でキリスト教の「日本化」を内容とするものであった。

しかし、同時に日本の「キリスト教化」としての、唯一人格神に基づく、世界主義・普遍的倫理の自覚を忘れないものであった。

一九三〇年代に国粹主義の下に声高に主張されるようになった「日本的キリスト教」は、キリスト教の「日本化」の面が極端に推し進められて、日本の「キリスト教化」の面が失われたもので、最早キリスト教とは、言いがたいものであったのではなからうか。

中島重も指摘したように、「日本のキリスト教化」と「キリスト教の日本化」をその内容とする海老名の「日本的キリスト教」は「キリスト教の日本化」に偏向した「日本的キリスト教」と比較すると「健全」なものであったと言える。当然のことであるが、その「健全」さは、「キリスト教の日本化」に偏向した「日本的キリスト教」と比較してのことであって、真実の意味で「健全」であったかは、海老名が、日本民族の膨張を肯定し、朝鮮の日本への同化を主張するなどしていることを考えると、疑問のあるところである。

また、本稿では詳細に考察することは出来なかったが、海老名には「日本化」の理想として、武士道があったことも考慮する必要がある。彼が渡米した際、アメリカ在住の日本人青年へのメッセージとして強調したのは、武士道に基づくキリスト教であったし、欧米を視察して帰国後に教会で主張したのもクリスチャンのサムライにならなければならぬということであったからである。

宗教なき国民に偉大なるはあらず、日本は宗教を有し、道德を有し居る国民なり、日本の世界に献ずるは武士道の上に築き上げられたる基督教の道德、即ち世界最高の道德ならざるべからず。³⁹

吾々は又クリスチャンの武士を作らねばならぬと思ふ。諸君と共にクリスチャンのサムラヒサムライにならねばならぬ。これは今から覚悟してかゝるべきことだ。⁽⁴⁰⁾

この点においては、内村鑑三も同じであつたと言える。彼は武士道に接木されたキリスト教(41)の必要性を主張した。

人類の理想はキリストである、日本人の理想は武士である、而して武士が其魂を失はずして直にキリストを信ぜし者が余輩の理想である、キリストを信ぜざる武士は野蛮人である、町人根性を去らずしてキリストを信ぜし者は偽の信者である、而かも得難きは此武士的基督信者である。⁽⁴²⁾

内村と同じく海老名も、町人・農民根性的民衆を高潔な武士的人間にするのがキリスト教であると考えた。それゆゑに彼等の主張したキリスト教は、唯一人格神に基づく倫理を強調し、またそれを実行する意志を強調した。海老名の神学・思想が新神学に基づきリベラルであつたにもかかわらず、その生活が倫理性に富んでいたのも、クリスチャンのサムライに彼の理想があつたからにほかならない。

海老名の「日本的キリスト教」は、魚木の言う他の五類型と並ぶような独自性を持つことを意図して主張されたものであるが、「日本的キリスト教」は五類型と対等に並び得るほどに完成・成熟したものではない。海老名自身、そのことは自覚していた。彼は「日本的キリスト教」の樹立は「実に百年以上の永き年月を経過するにあらざれば、その大目的は達せられないのである」⁽⁴³⁾と述べているからである。

海老名の「日本的キリスト教」は、近代日本におけるキリスト教受容史では、正しく評価されていないと言える。筆者は、「日本のキリスト教化」と「キリスト教の日本化」を内容とする「日本的キリスト教」の樹立に努めた海老名の思想は再考される必要があると考える。

注

- (1) 湯浅八郎「追悼之辞」『同志社新報』一六号、三頁。
- (2) 「日本精神に同化したキリスト教。特に、昭和初期より太平洋戦争終結までの間、国家至上主義下の偏向したキリスト教を指す。(略)海老名弾正は日本精神とキリスト教との一致をはかり、神道や儒教とキリスト教との間に共通の土台を見いださんとした」(『キリスト教大事典』七九二頁。なお、「日本的キリスト教」の定義に関しては、熊野義孝「福音と世界」一九七二年一月号、土肥昭夫「日本キリスト教歴史大事典」などがあり、論文としては笠原芳光「日本のキリスト教」批判「キリスト教社会問題研究」第二号、最近のものとしては、原誠「戦時期のキリスト教思想」——日本的基督教を中心に——『基督教研究』六一巻二号がある。
- (3) 中島重「海老名先生についての断片」『社会的基督教』第六巻七号(一九三七年七月)二〇頁。
- (4) 一九一〇年三月に掲載された論文の中で「基督教を日本化して、日本的基督教にせよとの叫び声は二十年前より聞き始めた」(『新人』一一巻三号、一頁)とあるので、これに基づく「日本的キリスト教」が主張されるようになったのは、一八九〇年ということになる。
- (5) 「日本将来の基督教」『六合雑誌』一一四号、三頁。普及福音教会の機関誌『真理』は、横井の主張に賛成して「吾人は日本の基督教が果して日本の基督教たるのを待て之れを歓迎せんと欲するものなり」(一一号、六頁)と応じた。
- (6) 魚木忠一「宮川経輝先生と日本基督教神学」『基督教研究』二二巻一号、三頁。
- (7) 「新人」一一〇巻一〇号、三頁。
- (8) 「外国宣教師の凡てが立派なる人物であつたかは、我れ之を知らぬ。然れども篤実温公の士君子が少くなかつたことは日本人の一般に疑はなかつた所である。フルベツキの如き、ハリスの如き、カクランの如き、ペレーの如き、デビスの如き、普く日本人の尊敬と親愛を受けた。宣教師とさへいへば親切であるといふ事は、一般日本人の信仰した所である。この外奇癖に富みたる性格はあつたなれども、真に日本人の為に尽したる教師があつた。ゼンスの如きクラークの如きは其人である。この英雄的人物と彼の君子的人物とは深く日本人の敬愛心を引き起こした」(社説「開教五十年を祝す」『新人』一一〇巻一〇号二、三頁)。

- (9) 海老名彈正「日本に於けるプロテスタント教進歩状況」『太陽』一二卷九号、一八四、五頁。
- (10) 海老名彈正「レッシングの宗教思想」『新人』一卷一〇号、一三頁。
- (11) 海老名彈正「ギユリキ氏の日本人の進化を読む」(其二)『新人』五卷八号、一六頁。
- (12) 海老名彈正「日本に於けるプロテスタント教進歩状況」『太陽』一二卷九号、一八五、六頁。
- (13) 「以前は基督教徒以外の人は地獄に落ちる。憐れな者だと云ふ考で、乞食に物を与ふる如くした」(海老名彈正「舟を沖に出せ」『新人』一一卷三号八頁)。
- (14) 「世界列国の大家族は必ず大宗教を有す、大抵即ち基督教なり。この基督教なるものは元々一民族より発展し世界的宗教となりたれば、之に民族的性質の付着して居ること論を待たず、又列国の宗教なるが故に勢ひ二大要素を有す、一は民族的にして一は世界的なり。その民族的なるものは各国民に属するものなり、大家族の共通する所にあらず。是れ英の基督教が露の基督教と異なり、独の基督教が仏の基督教と異なる所以なり」(社説「列国大家族とその宗教」『新人』一一卷八号、四頁)。
- (15) 海老名彈正「信仰と国民の品性」『新人』一一卷一〇号、三一頁。
- (16) 社説「如何にして模倣時代を超越すべきか」『新人』一七卷二号、一七頁。
- (17) 海老名は、初めての欧米旅行の前に「外遊発展の辞」(『新人』九卷六号)を著し、その中で「余は神儒仏の精髓を有する日本のクリスチャンたるなり」(三頁)と記している。
- (18) 海老名彈正「国民の洗礼」『基督教世界』一三六二号、三頁。
- (19) 同書
- (20) 海老名は「新人」の創刊号の社説と論文で「宗教は發揮すべく、輸入すべきにあらず。(略)宗教心は之を發揮するの一事あるのみ。故に宗教の道具は之を海外に購ふべきも、宗教其れ自身は之を内国に發揮するの外なし。吾人が当初より日本的基督教を主張するも是れが為なり」(社説「基督教の形骸」四、五頁)。「吾人の期する所は宗教の輸入にあらず、宗教の發揮なり。蓋し真の宗教は發揮すべきものにして、輸入すべきものにあざればなり」(「時勢到来」一二頁)と記している。
- (21) 「自由神学の勃興とともに、キリスト教と他宗教との習合的傾向が生じたということですね。海老名さんが、エホバの神は日本神道の天御中主神と同じで、日本魂の進歩したのがキリスト教であると唱えて、神道的キリスト教と呼ばれた。(久山康編『近代日本とキリスト教』(明治篇)二二三頁)。
- (22) 海老名彈正「日本固有思想と基督教」『新人』一六卷六号、一三六、七頁。
- (23) 「日本人の神観念の中に、抽象的な超越者、唯一絶対者というような存在を意識した例が全くなかったわけではない。例えば『古事記』の冒頭に

は、「天地の初発の時、高天の原に成りませる神の名は」として、天之御中主神という、かなり観念的な神の名を揚げてゐる。しかし、天之御中主神は日本の社会の中では、神社の祭神としてまつられることはなかつた。まつられたのは個々の具体的な事物なり、自然現象なりに即した神々であつた。つまり日本人は事々物々に即して、そこに内在する神を觀たわけで、抽象的観念的な超越的存在に対しては、否定はしないものの、それを實際の崇拜の対象としてまつることはしなかつたのである（真弓常忠「神道の世界」四三頁）。

(24) 海老名彈正「日本固有思想と基督教」『新人』一六卷六号、一三五頁。

(25) 社説「耶穌の宗教意識に於ける自己實現」『新人』二三卷四号、三、四頁。

(26) 「基督教の中には所謂東洋思想の如き、悉皆包含せらるゝのである。東洋思想を以て基督教の欠点を補はんといふが如きは、その如何に基督教に不案内なるかを告白するに外ならぬ。基督信者でありながら態々釈迦の弟子となりて救済の道を尋ぬるやら、或は達磨の弟子となりて始めて徹底せんと欲するが如き、基督教より見れば如何にも氣の毒千萬なことである。神秘主義といひ、理知主義といひ、超絶主義といひ、汎神主義といひ是等の諸主義は盡く皆一要素として基督教の中に包蔵せらるゝ」（社説「宗教勃興の徴」『新人』一四卷八号、一六頁）。

(27) 社説「吾人が本領の勝利」『新人』一四卷二二号、一三頁。

(28) 海老名彈正「世界の大勢に対する吾人の態度」『六合雜誌』二〇六号、一〇、一頁。

(29) 「吾人が本領の勝利」一五、六頁。

(30) 海老名彈正「舟を沖に出せ」『新人』一一卷三号、七頁。

(31) 社説「福音主義の新旗幟」『新人』五卷一号、一頁。

(32) 社説「何を以て伝道せんとするか」『新人』一七卷五号、一一—三頁。なお、唯一神と個人の倫理的關係については、『新人』一六卷六号、一六、七頁も参照。

(33) 海老名彈正「宣伝すべき基督の福音」『新人』一九卷七号、一六頁。

(34) 海老名彈正「基督の僕と友」『新人』一二卷九号、一三頁。

(35) 海老名彈正「求道者の疑惑と之れが解決」『開拓者』一〇卷二号、四一頁。

(36) 海老名彈正「戦乱後に於ける宗教問題」『新人』一九卷二号、七頁。

(37) 魚木忠一「日本基督教の精神的伝統」二二、三頁。

(38) 魚木忠一「海老名先生の神学思想」『基督教世界』二九二八号、二頁。

(39) 一九〇八年六月四日、アメリカ・オークランド第一美以教会で日本人各教会青年連合主催の大演説会（聴衆七百人）でのもの（千葉豊治「桑港附近海老名牧師活動の状況」『新人』九卷九号、三六頁）。

(40) 「教壇余響」『新人』一〇巻一号、一五頁、本郷教会で牧師歓迎会の席上答辞。同じ内容のものが『基督教世界』一三三二号にもある。

(41) 「武士道は日本国最善の産物である、然し乍ら武士道其物に日本国を救ふの能力は無い、武士道の台木に基督教を接いだ物、其物は世界最善の産物であつて、之に日本国のみならず全世界を救ふの能力がある。(略)世界は畢竟基督教に由て救はるゝのである、然かも武士道の上に接木される基督教に由て救はるゝのである」(内村鑑三「武士道と基督教」『聖書之研究』一八六号、一頁)

(42) 内村鑑三「キリストと武士」『聖書之研究』三九号、二頁。

(43) 社説「日本化かはた基督教か」『新人』一一巻三号、一頁。

* 『新人』の無署名の社説は、全てが海老名ではないが、ここで引用した社説は、海老名の著書に収められたり、内容などから海老名と確認できるもののみ用いた。

(二〇〇一・九・三〇)